小中野小

自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成

（３年計画の３年次）
校長　花生　典幸

１　研究主題について

これまで本校では、国語科と算数科の授業を中心に「対話する場面」を意図的に設定し、２年間研究を進めてきた。１年次は、対話のさせ方(発問、教材へのしかけ、対話をファシリテート)を工夫して指導を継続してきた。それにより、相手の話をじっくり聞こうとする児童が増えた。相手の意見をしっかりと受け止め、共感しながら聞こうとする姿が多くみられるようになった。また、自分の考えと相手の考えを比較しながら聞くことができるようになってきた。相手の考えをしっかりと受け止め、その上で自分の思いや考えを相手にわかりやすく伝えようとする姿も多くみられるようになってきた。しかし、全体的に見ると、友達の話を集中して聞くことができなかったり、自分の考えをもっているのだが、その考えをうまく相手に伝えられなかったりする児童の割合も依然として多いことが分かった。そこで、２年次は、より「対話」に焦点を当て「対話のベース作り」「『対話する場面』の工夫」の２点を研究の中心とすることとした。「対話のベース作り」を継続して行うことにより、友達の話を自分事として真剣に聞くようになり、話を聞く姿勢に良い変容が見られるようになった。対話を継続的に行わせることにより、何でも話そうとする意欲に向上も見られた。友達の話を肯定的に聞きながら対話をする姿が多く見られるようになってきた。そして、「『対話する場面』の工夫をする」ことにより、対話に必要感が生まれるようになった。対話の仕方を教師がアドバイスすることにより、子ども同士の対話スキルに大きな向上が見られた。しかし、子どもたちの対話場面で教師がファシリテートしすぎるあまり、子どもが主役になりきれず、子ども本位の問題解決のための対話に至らないことも少なからず見られた。

そこで、今年度は研究テーマと研究教科はそのままで、昨年度までの研究の成果を生かしながら、子どもたちの力で問題解決ができる子どもたちを育てていく必要がある。子どもたちから生まれた問題を解決するために、子どもたちの力で対話をさせていく場面をできるだけ多く設定するようにする。その際に、教師がすぐにファシリテートするのではなく、子どもたちに育った対話力を信じ、子どもたちに任せるよう心がけていく。２年間の研究で身についてきた「話を聞く力」「自分の考えを意欲的に伝えようとする態度」「自分の考えを巧みに伝えるスキル」を生かし、対話を通して、子どもたちなりの答えを見出し問題解決ができるような子を育てていきたい。以上のようなことをもとに、自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもの育成に努めていきたい。

２　研究のねらい

自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもを育成するための効果的な指導のあり方を、国語科と算数科の学習における授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

授業の中に「対話する場面」を意図的に設定し、対話のさせ方を工夫することにより、自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもを育てることができる。

４　研究内容

（1）対話のベース作り

ア　話を聞こうとする姿勢の育成

イ　進んで話そうとする意欲の喚起

ウ　何でも言い合える学級の雰囲気づくり

（2）「対話する場面」の工夫

ア　発問の工夫

イ　教材へのしかけ、提示の仕方

５　研究の経過

(1)　研究仮説に基づく授業研究

月	日	研修内容・学年・授業者等
１１	１	第１回授業研究（５学年）授業者　教諭　三浦　圭太 算数「表を使って考えよう」
１１	２２	第２回授業研究（６学年）授業者　教諭　野里　さや香 国語「やまなし」

(2)　一般研修

月	日	研修内容・講師・概要等
5	３１	「プールの使い方」についての研修　講師：本校教諭
6	１４	「クロームブックの活用」についての研修　講師：本校教諭
6	２２	「のびゆくちぐさの子」を活用しての児童理解の研修（下学年）
6	２８	「のびゆくちぐさの子」を活用しての児童理解の研修（上学年）
6	３０	「特別支援の視点を活かした授業づくり」について 講師：立教大学現代心理学部　教授　大石　幸二先生
8	３０	青森県学習状況調査採点と分析

６　研究の成果

(1) 対話する場面を多く設定することにより、対話をすることに慣れ、子どもたちが主体となって対話し問題解決をしようとする姿が、多くの子どもに見られるようになった。また、教師が頻繁にファシリテートしなくても、自分たちの力で対話を継続できるようになってきた。

(2) 日常的に対話をさせることにより、授業以外の場面でも子どもたち同士で問題解決するために対話するようになってきた。その際に、友達の考えをしっかりと聞き、自分の考えと比較しながら意見を言うことができるようになってきた。

７　研究の課題

(1) 積極的に対話をしようとする子が増えてきてはいるが、なかなか勇気を出せずに対話に参加できない子もいる。全員が自分の考えをもとに積極的に対話できるよう、ペアやグループでの対話を活用したり、対話するためのスキルを指導したりしていく必要がある。

(2) 教師の出番（ファシリテートするタイミング）を見極めるのが難しい。子どもが主体となる対話をさせるにあたり、ファシリテートする適切なタイミングと言葉の吟味をさらにしていく必要がある。　（記入者　佐々木　亮輔）